

日永追分

東海道と伊勢参宮道の分岐点。伊勢神宮への二の鳥居、常夜燈、石の道標などが残っている。安永3年(1774)江戸の商家・渡辺六兵衛が伊勢神宮を遥拝するようにと、高さ7mの鳥居を建立した。大きな石の道標は嘉永2年(1849)に建立。江戸時代の鳥居周辺には茶屋や旅籠などが建ち並び、四日市宿と石薬師宿の間の宿として伊勢神宮参詣の人々でにぎわっていた。

杖衝坂・芭蕉句碑・血塚社

日本武尊が東国遠征の帰途、伊吹山の賊と戦い負傷。剣を杖の代わりにしてこの坂を登ったところから、杖衝坂の名が付いたといわれている。日本武尊は坂の途中で「吾が足三重の勾の如くして甚疲れたり」と言って休んだ。これが三重郡や後の三重県名の由来となった。坂の途中に芭蕉の句碑が建ち、坂の上に日

本武尊が出血した足を洗ったという血塚社がある。

大木神社

延喜式内社で石薬師の氏神。元は字船塚にあったが、寛永年間(1624〜44)に当地に遷座。天照大神(皇室の先祖神)、須左之男尊(天照の弟)、大國主命(大黒様)、日本武尊(景行天皇の皇子)、仁徳天皇など九神を祀る。境内は木々に覆われ鎮守の森である。約百種類の樹木や草木が混生し、その主体はシイの木である。

小澤本陣跡

小澤本陣は元和2年(1616)石薬師宿開設時からの本陣で、二百二十九坪あまり(約756㎡)の建物だった。古い宿帖が保存されており、赤穂藩主浅野匠守や大岡越前守が泊まっている。元禄元年(1688)から22年間に百四十五回の宿泊と四百三十三回の休憩しかなかった。細川家から

拝領した太刀や各地の大名から下賜された陶器など多数が保存されている。

佐佐木信綱生家

歌人で国文学者の佐佐木信綱は、弘綱を父として明治5年この家に生まれ、石薬師で六歳まで過ごした。生家は父が明治元年(1868)に建てたもので、隣の小学校まで屋敷地だった。記念館には文化勲章などの遺品や遺稿二千点を収蔵、展示している。

石薬師寺

正式には高富山瑠璃光院石薬師寺という真言宗の寺院。平安初期、弘法大師が靈石(花崗岩)から一夜にして爪で刻んだ薬師如来立像を本尊として建立。寺名を石薬師寺とした。本堂(薬師堂)は戦国時代に焼失し、寛永6年(1629)神戸藩主の一柳直盛によつて再建された。広重の保永堂版『東海道五拾三次 石薬師』は山門前の道から石薬師寺方向を見た風景である。

道中記一筆：

Blank lines for writing a travel diary entry.

献立道中記：〈味の評価：□上々 □上 □中 □下〉

名所・旧跡書留め：

Blank lines for listing famous spots and old sites.